

モラトリアム研究者の思い出 —日野舜也さん座談③ カメルーン—

鵜飼 正樹

「アフリカ部族社会の比較調査」

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（以下、AA研）では、いくつかのプロジェクトに参加したのですが、中心的に参加したのは「アフリカ部族社会の比較調査」でした。富川盛道さんが研究代表者となったこのプロジェクトの最終目的は、タイトルにもあるように、アフリカにおける現地調査、つまり、フィールドワークでした。京大グループとしてわれわれが参加したところからはじまった、文部省の「科学研究費補助金（海外学術調査）」という制度があって、われわれもそれをもらおうというので、1967年度から計画書を作って申請したのですが、けっきょく1969年に初めて補助金がつきました（「アフリカ部族社会の比較調査」 研究代表者・富川盛道）。

われわれがフィールドとして選んだのは、カメルーンとナイジェリア、そしてエチオピアです。そのころには、京大隊をはじめとして、東アフリカには日本の研究者がいくらか入っていました。でも、まだ西アフリカはあまり手をつけられていませんでした。山口昌男さんがナイジェリアのジュクン族の王国調査をおこない、また、そのころにはすでにフランスから川田順造さんがオートヴォルタ（現ブルキナファソ）に、阿部年晴さんがイギリス経由でガーナへは行っておられたはずですが、それはまだわれわれの情報網に入っていませんでした。それで、AA研での研究は、まず、日本で手がつけられていないフロンティアのフィールドをやろうと

考え、西アフリカ、それもカメルーン中心でいこうときめたのです。

アフリカ理解の要の地・カメルーン

なぜカメルーンを選んだのかというと、アフリカの理解にとって、歴史的にも、社会的にも、文化的にも、カメルーンは重要な要の位置にあるという認識からでした。

第一は、アフリカの人びとの移住、モノの移動について、カメルーンが重要な通過点になっていることです。

まず、「バントゥ・エクспанション」といわれるものがあります。東アフリカから南アフリカにかけてすんでいるマジョリティのアフリカ人は、一般に「バントゥ」と呼ばれている人びとです。これはバントゥという民族がいるわけではなくて、数百の似通った言葉を話す部族を一括した語族が、このバントゥです。19世紀に南アフリカの言語学者が、この共通性のある言葉をしゃべる人びとに「バントゥ語族」という名称を与えました。日本の教科書などには、しばしば、したり顔に「アフリカのバントゥ族」なんて書いてありますが、これはでたらめで、バントゥは民族などではなく、かれら自身、統一意識どころか、そんな意識などまったく持ったことのないものです。ただ、強いていえば、隣の部族とは、何時間か一緒にいれば言葉が通ずる、そのくらいの認識は時にはあります。言語学者にいわせれば、方言程度のちがいはないといえます。もちろん、東アフリカのスワヒリ語と、カメルーンのエウォンド語が通ずるということはありませんが、名詞を

いくつかのカテゴリーに分類する、そのカテゴリーに従ったプレフィックスで、あとの動詞や形容詞につく接頭辞がきまってくるといった、文法構造は似通っています。この共通する特徴を持った多くの異なる言葉を話す人びとが、ナイジェリア東部から、カメルーン、そして、東アフリカ、南部アフリカと、アフリカ全体の何分の1かの広い地域に散らばっている。

このような、たぶん、オリジンを同じにする同類の言葉が広い地域に分散しているということは、それらの人びとが移住によって非常に速い速度で居住地を拡大していったということを意味しています。かれらが、西アフリカのナイジェリア東部あたりからスタートしたとして、東アフリカまで4000キロ。そこからアフリカの南端まで4000キロ。移動開始時期がほぼ2000年前と推定されていますから、その先端の人びとは、ほぼ年速4キロで動いたこととなります。これは、ワゴントレインを組んで、西へ、西へと、インディアンを押しつけて進んでいったアメリカ開拓よりは遅いけれど、かつてのゲルマン民族移動、モンゴル民族やトルコ系民族の動きに比べても、そう遜色のない大規模な民族移動です。車輪を使うこともなく、次々に野原を焼いて耕地を移動させる「焼き畑農耕」をしながら、ずっと動いていったのです。途中でウシを手に入れたグループもあります。このような西から東への大移動は、カメルーンを通らないと行けないのです。

また、アメリカの人類学者マードックが提唱した「ヤムベルト」というものもあります。いつのころか東南アジアから東アフリカ海岸に到達したヤムイモは、いまは、西アフリカ森林部の主食の一つになっています。その栽培は、東アフリカから西へと広がっていったのですが、そのルートも、カメルーンを通らないわけにはいきませんでした。端信行さんが、われわれの隊員としてこのヤムベルトの調査をやりました。東南アジア原産のバナナやマンゴーも、同じようなルートを通りました。また、西アフリカからメッカへのイスラームの巡礼ルートもここを通っています。このように、カメルーン

は、東西アフリカを結ぶ、重要な通過点なのです。カメルーンは東西アフリカの比較研究にとって、落とせない重要な場所だというのが、われわれの目のつけどころでした。

二番目には、カメルーンの南端は熱帯雨林、中央部はサバンナで、北部へ行けば、ほとんど砂漠だということです。つまり、アフリカ全体に見られる植生が、このカメルーンのなかでつながっているのです。ですから北へ道なりに行けば、熱帯雨林のあつい密林から、アダマワの高原性サバンナ、ベヌエ川上流の低地サバンナ、マルア周辺のブッシュサバンナ、チャド湖近くの半砂漠と、アフリカの主要な気候地帯のほとんど全部が見られるのです。

三番目には、カメルーンは、第1次世界大戦まではドイツの植民地でしたが、その後、西部はイギリス領、東部はフランス領と、二つの宗主国をもちました。つまり、アフリカで大地域を支配したイギリス、フランス両国の植民地支配体制が一国内で比較できる唯一の国なのです。カメルーンは、英語、フランス語両方を公用語にしているめずらしい国です。ですから、公文書、政府の出版物の多くが、フランス語と英語の併記ですし、ヤウンデ大学では、フランス語のコースと英語のコースの二つが開かれていました。いまは、西カメルーンのンベヤに、英語で教えるンベヤ大学ができました。ちなみに、調査開始時にはヤウンデにしかなかった大学が、いまは各主要都市にできています。わたしの調査地であるガウンデレにもできました。

それから、北はイスラーム圏、南はキリスト教圏という、西アフリカにおける地域的宗教分布が、はっきりと見える国でもあります。

一 国人類学というアプローチ

カメルーンをフィールドにするにあたって、富川盛道さんとわたしは「一国人類学」ということを念頭に置きました。いままで、どちらかといえば個々の部族社会を集中的に研究対象にしてきた文化人類学に対して、富川さんは多部族からなる広域社会における部族関係を対象にした地域人類学を提唱しました。個々の部族社

会ではなく、複数の部族の社会関係を対象にしようということでした。そしてカメルーンでは、その一つのまとまりとしての一国、国家を研究対象の視点の一部にしようとかんがえたのです。多様性を持った多くの部族社会が、植民地化という外的暴力によって一つにまとめられ、多くの部族が、国境で二つの植民地に分割されるという事態が生じました。アフリカ全体で、独立した部族のうちの4割近くが、植民地分割によって二つ以上のちがった植民地に分割されてしまった。コンゴ王国などは、仏領コンゴ、ベルギー領コンゴ、ポルトガル領のアンゴラの三つに分離されたのです。その植民地体制が、あまり修正されることなく、その矛盾をそのまま内包して独立国になった。そういう場面で、アフリカの伝統的な多部族共生社会を見つめてみようということでした。

いま考えると、この対象としてカメルーンは大きすぎたかもしれません。とうぜん、この試みは一人や二人の研究者の研究によってはもちろん実現できません。でも、その後の江口一久さんのフルベをはじめとする北カメルーン諸部族の研究、また和崎春日さんのバムン、嶋田義仁さんのフルベ、端信行くんや和田正平くんらの西カメルーンのいわゆるGrassfieldの諸王国、野元美佐さんのバミレケ、そして多くの後続の研究者、あるいは、近年輩出したカメルーン地元の研究者たちの地道な郷土研究のフィールドワークデータの集積によって、いつか芽が出るアプローチだと思っています。実際に、カメルーンの大学、とくに、新設されたガウンデレ大学では、大学院にじぶんの出身部族の歴史や民族誌の研究をこころざす若者が輩出しているそうです。楽しいことです。

首都ヤウンデで調査許可を取る

われわれの最初の仕事は、首都のヤウンデでカメルーンでの調査許可を取ることでした。それを聞いたカメルーンの研究たちがまず口にしたことは、「おまえたちのように遠い日本からやってきた研究者が、なんでカメルーンを研究対象にするのか」ということでした。とく

に、宗主国であったフランス人のカメルーン研究者からは、既得権侵害と映ったのでしょうか、ずいぶん警戒されました。自分たちが研究機関をつくって主宰してやってきたこのテリトリーを、なんで日本人が？ ということでした。なにか他意があるに違いないというわけでは。「自分の国や、自分の国に近いところをやるうというのならわかるけれど、なんでわざわざカメルーンくんだりまでこなくてはいけないのか」と。そこで、何回もパーティを開いて、われわれを呼ぶのです。そのたびに、同じ質問が出てきました。おかげさまで、高い給料をもらっているフランス人研究者にけっこうごちそうにもなりました。

われわれは、いろいろな答えを用意していましたから、先ほど述べたようなことを主張したのです。はじめからわれわれを理解してくれて協力を惜しまなかったのが、2004年にナイジェリアのマイドゥグリで客死されたエルドリッジ・ムハンマドさんでした。30年近くにわたって、共同研究に参加してくれました。多くの歴史的伝承資料のテキスト化に大きな業績を上げ、国際的な評価をされた歴史学者です。フランスの研究者では、バムンの歴史を研究されていたクロード・タルデイスさん、北部のいくつかの社会を研究されていた民族学者のフランソワーズ・ヴァンサンさんなどが、いろいろ助けてくれました。

それで、何とか1ヶ月くらいで調査許可が取れました。まだカメルーンに日本大使館がないところで、当時、カメルーンとの合弁会社、ソカカオ(SOCACAO)というココア・バターを作っている工場の総支配人として、三井物産から出向されていた永田逸三郎さんが、全面的に助けてくれました。政界、経済界に顔が広く、文部大臣に紹介してくれたりしました。ソカカオには、日本の大東カカオという会社から、たくさんの技術者が家族できておられ、仲よくしていただきました。その初代工場長だった米城肇さんは、現地で急逝され、お墓が工場の敷地のなかにあります。いまも行けば、お墓参りをします。

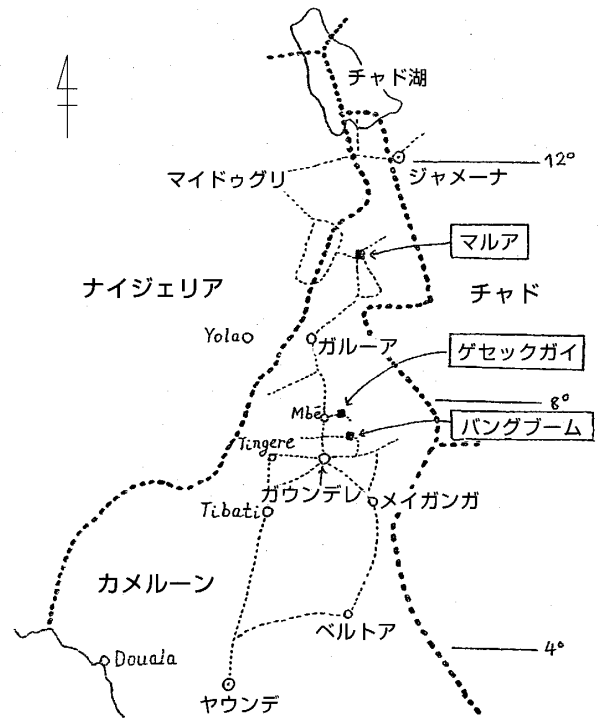
フィールドをさがす

カメルーンでのわたしの主なフィールドは、カメルーン北部州アダマワ県。アダマワ高原の中央部になるのですが、そこをフィールドに選ぶまでに、富川盛道さん、端信行くん、江口久くん、そして、わたしの4人で、カメルーン北部から、ナイジェリア東部、チャドの首都ジャメーナまで、あわせて1万8000キロほどを、2ヶ月かけて回りました。江口くんは別働隊で、われわれのはいる1年前に、京都大学の大サハラ学術調査隊のメンバーとして、北部州のマルアに入っていました。この調査隊は、梅棹忠夫さん、中尾佐助さん、木村重信さん、川田順造さんなどがくわわって、サハラの南縁を西から東に駆け抜けようという計画でした。その中で、後まで続く仕事をしたのが、カメルーンの江口くんと、エチオピアの福井勝義くんです。

調査許可がとれ、帰国するフランス人研究者が置いていくランドローバーを首都ヤウンデで安く買い、サルモンというドライバーを雇って出発しました。サルモンは、西カメルーンのパミレケの出身で、フランス語とピジン英語を話しました。

ヤウンデから、北東部のベルトア、そこから北上して、アダマワ高原にあがり、メイガンガ、ガウンデレ（正書法ではNgoundere、「ンガウンデレ」だが、以下、ガウンデレと記す）から、北部州の州都のガルア、江口くんのいるマルア、そして、さらに北のチャド湖まで、くまなくカメルーン北部をあるいて、フィールドワークの対象地を探そうというのです。カメルーン一国をできるだけ広く観察しようということもありました。

ところが当時、マルアからチャド湖までのカメルーン国内のルートが、まったくの悪路でおれない。そこで、48時間限定のナイジェリアのビザをとって、いったんナイジェリア東部のマイドゥグリにはいて、そこからもう一度カメルーンにはいり、チャド湖に到達し、チャドの首都ジャメーナ、そして、チャドのなかに200キロほどはいて、また、同じルートで、ガ



資料1 カメルーンの地図

ルーアまで帰ってきました（資料1）。

この旅では、いろいろおもしろいことがあったのですが、そのひとつを話しておきましょう。国境を越える寸前とつぜんに道が消えてしまい、ワタ畑に沿った野原の中を走っているうちに小さな谷があり、それをかまわず越して、再び道に出たときに、とつぜん向こう側から、おなじ左側に対向車があらわれ、それが警察の車で、止まれといひます。警官がおりてきておまえたちは交通違反だといひます。そんなはずはないといったのですが、おまえたちは左側を走ってきたではないかといひのです。はっと気がついたら、われわれはいつの間にか国境を越えて、ナイジェリア領に入ってしまったのです。ナイジェリアでは、車は右側通行だったので、すぐに最寄りの警察に出頭することで、何とか許してもらいましたが、初めての国境での失敗でした。

そのあと、ナイジェリアから、再びカメルーンに入り、チャドへ入り、チャド国内を数百キロ走り、チャド湖を経て、おなじコースで、カメルーンにもどりました。地図上で入れるコースはなるべく回って、なるべく多くのところを

観察しようと、結局全部で2万キロくらい走りました。そして、ヤムベルトのカメルーンのルートにあたる、ベヌエ川源流部のドゥル族のゲセックガイで、端くんをおろし、あとは、わたしをどこで降ろそうかということが課題でした。北カメルーン調査行の途中でも、いくつかの魅力的候補はありました。一つはチャド湖岸に近いマカリ。でも、ここはあまりにも周辺すぎて、都市とはいえない。ナイジェリアにミチカというのめり込みそうな魅力的なまちがあったけれど、これはカメルーンではない。カメルーンのポリというファロ川岸のところも考えられたけれど、結局これもぴったりせず、やっぱりアダマワのどこかかなということになり、端くんをゲセックガイでおろしてから、富川さんと2人で、アダマワを回りました。ガウンデレを出て、西へ、そしてぐるりと北へ、200キロほどのすごい悪路を、時計と反対回りに回ってきました。

バングブームとの出会い

大きな砂ほこりをあげて、乾期の砂ほこり道のなかを走っているうちに、大きなマンゴーやユーカリの木々がひとときわ高いむらにでくわしました。それがバングブーム（正書法ではMbang Mboum、「ンバング・ンブーム」だが、以下、バングブームと記す）でした。むらに着いたとき、ちょうどお祭りの最中で、むら中央の広場で、太鼓をたたいて、子どもたちが輪を作って踊っていて、とてもいい雰囲気だったことが、気に入りました。

それで、この日、このむらに泊めてくれとお願いました。すると、盛装をした十数人の老人たちが集まってきて、広場に面したやしきの中に続々はいって行って、それからまもなく、「よかろう」という返事が来ました。われわれの滞在を認めるかどうかの、村長さんの御前会議だったようです。そこで、富川さん、わたし、それにドライバーのサルモンと、それぞれ別のやしきに泊めてもらいました。食事は、村長さんのところからとどけられました。ご飯とりの煮込みスープでした。あとでわかったこ

とは、これは客人に対する、いちばんのご馳走なのでした。わたしの泊まった部屋は、木製で縄で編んだマットがついたベッドがおいてあって、下でニワトリが卵を抱いていて、寝返りするたびに、コッココッコと文句をいうのです。深夜まで、太鼓の音、人びとのさざめきが聞こえてきました。これはいいむらだなと感じました。

翌朝、村長さんから差し入れのミルクティと揚げドーナツの朝食をいただきながら、富川さんに「わたしはこのむらが気に入りました」というと、富川さんが「いやあ、わしもきみがそういうのじゃないかと思ってたよ」。それで、村長さんに「このむらにすみたい」と申し出ました。そうしたら、また御前会議が開かれて「よろしい」ということになりました。そこで、「1ヶ月後にくるのでよろしく」とあいさつして、われわれは出発しました。そして、ガウンデレを通過して、今度は、カメルーン中央部の大森林地帯を南下して、首都ヤウンデに帰りました。旅の途中で、富川さんは、10本の足の指8本に砂ノミが入っていて、とめてもらったサナガ川河畔の民家の息子に全部とってもらいました。ひょう疽のように痛むのですが、富川さんはよく我慢していたと思います。「わたしは糖尿だから、血があまくて、砂のみが好むんじゃ」なんていっておられました。この民泊でまいったのは、この家族が熱心なプロテスタントで、われわれも朝4時の礼拝と聖書素読につきあわされたことでした。首都ヤウンデへ戻り、支度を調べて、20日後、バング・ブームにもどりました。

このむらを選んだ大きな理由は、カメルーンでは、都市からではなく、むらから都市にアプローチしようと決めていたからでした。これには、タンザニアでのウジジ調査への反省があります。ウジジではわたしなりに成果を上げたつもりだったんですが、調査には一つの大きな欠陥がありました。都市というのは、まわりに村落があって、その地域の中心として、都市であるわけです。ところがわたしは、ウジジでは、あまりにスワヒリに気をとられて、まわりの地

域をほとんど見ていなかった。いくつかの拠点は、車を持っているチンパンジー研究班に便乗してあるいたのですが、なんせ、じぶんは動き回れる車も持っていなかったし。そこで、カメルーンでは、まず、周辺の小さなむらから都市にアプローチしよう、つまり、地域人類学の方法で行こうと、富川さんと話していたのです。

こうしてわたしのカメルーン研究がはじまったのですが、この研究には、数年間の長期の計画がありました。まず、このバングブーム村に何回か数ヶ月ずつ住む。そのあと、このバングブーム村の人びとが、中心都市ガウンデレとどういう関係をもっているのかを、むらの人びとがガウンデレに行くときに滞在する場所をきっちり把握して、そこで何ヶ月か過ごして調査する。それから、ガウンデレ中心部そのものを対象にする。こういう計画でした。ですから、1969年からはじまったわたしのカメルーン研究は、71年、74年、75年、80～81年、82年、84年と、その計画に従って継続調査をすることになったのです（資料2）。

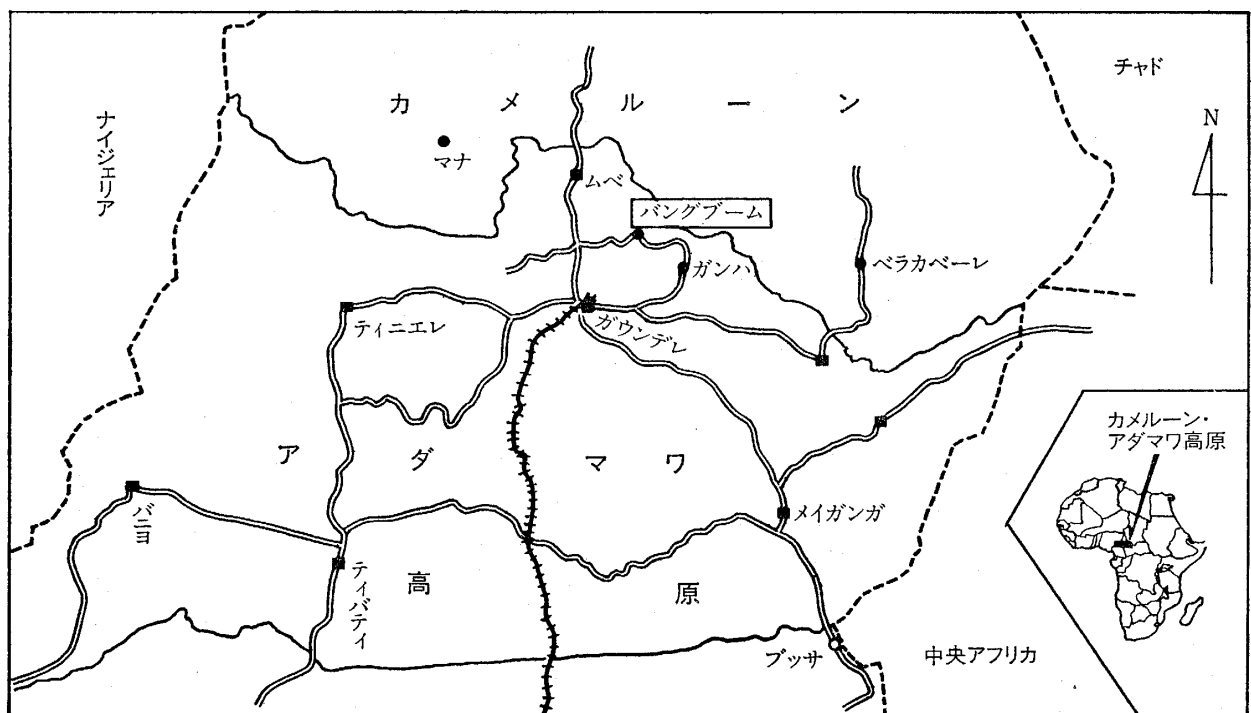
バングブームの聖なる王・ベラカ

バングブーム村の人口は、500人ちょっと。は

じめは雰囲気の良い、ただのありふれたむらだと思っていましたが、じつはたいへんなむらでした。なにかというと、このむらは、アダマワ高原中央部の先住民で、伝統的な「聖なる王（Divine King）」を持つブーム社会の首都だったのです。だから、村長さんとみえた人は、同時に「ベラカ」と呼ばれる、ブーム族の聖なる王だったのです。偶然にも、ラッキーにも、わたしは、こういうむらに行き当たってしまったのでした。

バングブームでわたしが下宿したのは、最初に泊めてもらったのと同じいえ、サルキヤキ・ウスマヌというむらの重臣のいえでした。そこがバングブームでのわたしの拠点となりました。

最初は本当にたいへんでした。ともかく、富川さんもわたしも、日本語、英語、スワヒリ語はできます。わたしは大学ではいちおう医学部志望でしたから、ドイツ語はやりました。けれど、フランス語は習っていない。カメルーンはフランス語が公用語です。むらの多くの人びとは、母語のブーム語、地域共通語のフルフルデ（フルベ語）、隣のドゥル語などは理解しますが、わたしが話す日本語、スワヒリ語はもちろ



資料2 アダマワ地方の地図

ん、英語も理解しない。そこで、富川さんやわたしが英語で質問すると、ドライバーのサルモンがフランス語に訳す。すると、フランス語を解する王様の息子が、ブーム語に直す。それにベラカが答える。それを息子がフランス語にする。それをサルモンが英語にと、ものすごいことをやったわけです。で、わたしは、日本に帰ったらフランス語をやろう、そして、いずれ、ブーム語やフルフルデを学ぼうと決心しました。

バングブーム村に入って、まず驚いたのが、村長さんであり、その正体といえば、ブーム族の伝統的な聖なる王である、ベラカの特異性です。まず、村人は決してベラカの顔をじっとは見ない。じっと見ると目がつぶれると信じている。これは、わたしは、小学校時代に天皇のご真影ですでに経験したことです。デジャヴュ（既視感）という感じでしたが……。

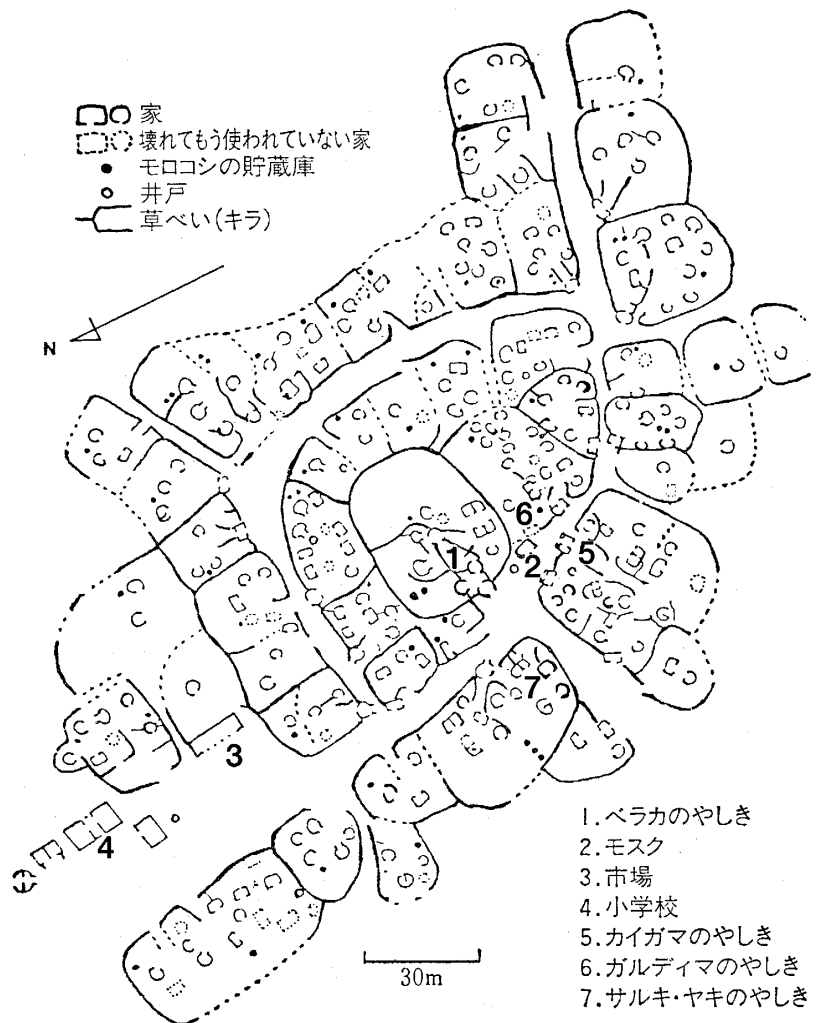
それから、ベラカがなにか問いかけない限り、じぶんのほうからは決して発言しない。ベラカの前に出ると、村人はみんな、ひざまずいてそっぽをむく。まるでベラカがそこにいるかのようにそっぽをむくのです。そして、ベラカが何か聞くとそれに答える。決して、自分から話しかけたりしない。たとえば、自分の父親が死んだことを報告に来て、じいっと、ベラカの前に座り込む。けっして、「たいへんです。父が死にました」などといわない。「どうしたのか？」と聞かれて初めて、「じつは、父がゆうべ死にました」と答えるのです。

むらの中央の広場に面した、サルキ・ヤキのやしきの前のベンチ代わりのユーカリの倒木に、みんなで腰掛けておしゃべ

りをしていると、突然、全員がそのベンチからすべり降りて、はきものを脱いでうずくまる。何が起こったのかと遅ればせに、わたしが気づくと、ベラカがやしきの前にお出ましになっているわけです。むらのそばのマンバラン川で、おばちゃんたちが洗濯をしている。そこに王様が現れたら、たいへんです。みんな、水の中にはいつくばらなくてはならない。

むらの世帯簿と地図をつくる

バングブーム村の調査で、わたしが最初にやったのは、もちろん言葉を学ぶことでしたが、同時に、むらの青年に助けってもらって、むらの基本的世帯簿をつくりました。まず、むらの現存する人びとのリストを作って、さらに、

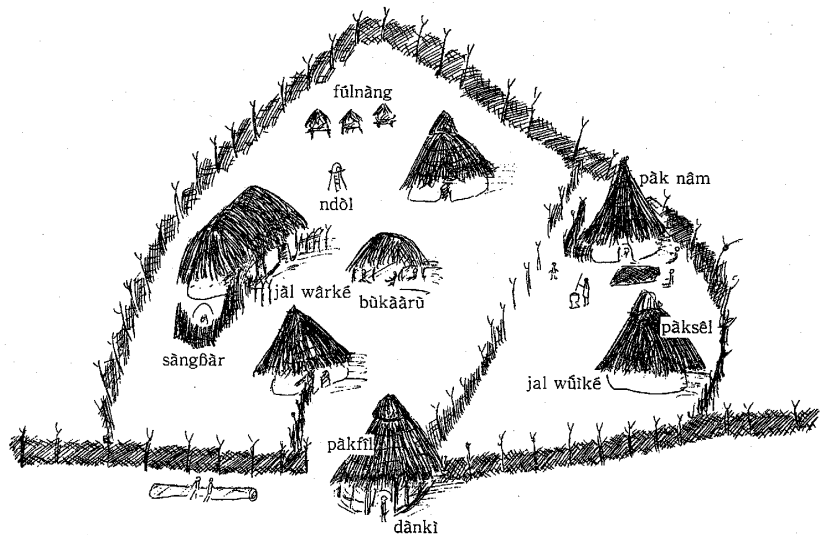


資料3 バングブーム村の地図

そのお父さん、お母さん、死んだおじいさんやおばあさん、そして兄弟や姉妹、どこのやしきのだれと結婚したのか、いろいろおっかけていって、かれらも、ひいじいさんが兄弟だったくらいまでは知っている人がいるのですが、そのうえまで追っかけてみたのです。日本などでは、役所に戸籍簿があって、それを調べればいいのですが、無文字社会では、そういうデータが、全部、人びとの記憶と知識のなかにねむっているわけです。みんな、日常的にいえば、

無意識の闇の中でねむらせているわけです。それを何とか引き出そうということです。その村人がしまっている無意識の引き出しを開けてもらったわけです。もちろん、むらいちばんの年寄りであり、かしこく、記憶力抜群のベラカにはずいぶん助けてもらいました。こうして、ぜんぶで46のやしきがあるのですが、1ヶ月くらいかけて、その親族関係、姻族関係がだいたい押さえられました。もちろん、そのあとに入ってきた情報は、付け加えていくわけです。そしてこの世帯簿に従って、系図を徹底的に作ってみました。文字記録のない、かつ、文字の機能しない社会での戸籍づくりは、けっこう楽しい仕事でした。まるでパズル解きのようなおもしろさがありました。

もうひとつが、むらの地図を作ることでした。あとになって、人文地理学の堀信行さんに、熱気球にカメラをつけてなどと教えてもらったのですが、もちろん、そんな才覚などなく、富川さんと一緒に、巻き尺をもってむら中を歩き回りました。なんせ、むら中を俯瞰する場所もないのですから、磁石と巻き尺をつかい、あとは歩幅、それをもとに地図を作りました。あとで、フランスが作った航空写真を手に入れたら、同じような形が小さいながらおぼろげに出てきて、「やったー」と思いました(資料3)。



資料4 キラの一例

バングブームのやしき・キラ

基本的に、バングブームのやしきも、ウジジに似て、道路に面した入り口のいえと、へいで囲まれたうらにわで構成されています。ウジジとちがうのは、そのやしきのなかに、丸い土壁、円錐型の草屋根を持った複数の家屋があることです。道路に面したいえは、「パックフィル(Pakfil)」。訳すれば“通路を持ったいえ”、つまり外からやしきの内部に通ずる通路があるいえです。まわりを囲むへいは、「キラ(kira)」。これは囲む(Kir)からきたことばで、「囲むへい」という意味と、それで囲まれた空間を指します。つまり、このやしき全体もキラと呼ばれます。これが、バングブームの基本的な世帯です。たとえば、わたしが住んだのはキラ・サルキ・ヤキです。

そして、パックフィルとその周辺(外側)の男の場所と、へいで囲まれた内側の空間の女の場所の区分がはっきりしています。パックフィルにしつらえてある男の火と、炊事のいえ「パックスル(Paksel)」にしつらえてある炊事用の女の火がありますが、男の場所パックフィルには女は入れませんし、男の火を女が触ることはできない。他方、パックスルにある女の火には、夫といえども、男は触れません。妻がいれば、夫は「台所のいえ」と「寝るいえ(Paknam)」のワンセットを用意しなくてはな

りません。妻が二人いれば、二組です。こういう住居空間の、男女隔離、男女分業がはっきり見えるのは、ウジジ同様、ここがイスラーム社会だからです。

パックフィルを持つキラと、持たないキラがありますが、だいたいお金持ちのキラはパックフィルを持ちます。持たないキラは、いつか何とかパックフィルを持ちたいと夢見ているのです（資料4）。

むらの女性の小遣い稼ぎ

ウジジで調べたような生業分化ですが、ここは都市ではなく、全員がいちおう農民です。しかし調べていくと、農業をやりながら鍛冶屋をやっている人、ミシンを持って仕立てをやっている人、週日ごとに動く定期市に商品や農産品を売りに行く人、農具や竹編みベッドをつくる人、自宅で作った揚げドーナツやピーナツ菓子を売る人など、いろいろ、農業以外にせせせとお金を売る手だてをやっていました。

もうひとつおもしろかったのは、ブーム社会では、農耕儀礼のためにモロコシでお酒を醸すのですが、これは女性の仕事、男がふれてはいけな仕事なのです。定期市がバングブームで開かれる水曜日の前日、火曜日には、いくつかのキラのうらにわの女の場所で、自家製のモロコシ酒を売ることがあたりまえになっています。そこでは、醸されたモロコシ酒が、ひょうたん1杯5フラン（当時は5円）で売られ、村人も、市場に来る商人も、男女の区別なく、飲みに来てきます。喧噪さんざめき、ときには、ケンゲン（親指ピアノ）などの演奏をする人もいます。ここでは、飲み手は酒代を払わなくてはなりません。酒造りの元締め女性の夫でも、それはすべて、元締めの女の収入になります。敬虔なムスリムであるベラカやむらの重臣の奥さんたちはやりませんが、その他の女性たちのよい小遣い稼ぎでした。

ブームの社会には、「スルガ・イム」という収穫の共同作業があります。「スルガ」というのは共同作業、「イム」はモロコシ酒です。乾期の終わりころ、主食のモロコシの収穫期に、

各キラのモロコシの脱穀が行われます。「明日は、誰それのキラでスルガ・イムがあるぞ」となりますと、その当日は、むらびとは脱穀用の棒を持って、その人の畑に集まります。そのいえでは、数日前から、女たちがモロコシ酒を仕込み、はたけの横でそれが振る舞われます。人びとは、モロコシの脱穀を手伝い、その間に、モロコシ酒を飲んで、いい気持ちで帰ります。次の日は、別のキラでまた、スルガ・イムです。こうして、40日ほど、人びとはほぼ毎日、どこかの脱穀を手伝い、モロコシ酒をごちそうになり、むら全体の脱穀が終わります。

むらびと全員がムスリムですから、本当はこれは御法度です。でも、男たちは「不信心の女たちはしょうがない」なんていいながら、共同作業に参加し、モロコシ酒を振る舞われるのです。だから、うらにわの女の場所での酒宴では、元締めの夫といえども、男たちは酒代を払わなければならないのです。伝統的な男女分業が、ここに姿を現します。女たちの酒造りを逆手にとって、貨幣経済のなかで、こういう「モロコシ酒の酒場」が登場したのです。

村人全員がムスリムですから、これはもちろん批判の対象で、敬虔なムスリムであるベラカや重臣のいえではモロコシ酒は出ず、食事の提供くらいで共同作業は完了します。不信心のわたしは、この酒場をはしごして、おごったり、おごられたり。ウジジのホテル同様、ここは重要な情報源になりました。

むらの重臣の組織「ドック・フー」

つぎに何を調べたのかというと、むらの統治、行政組織です。

まずベラカがいます。伝統的王であり現在の行政組織で言えば村長さんです。そして、3人の重臣がいます。カイガマ、ガルディマ、サルキ・ヤキです。あとで知ったのですが、はじめにむらで1泊したとき、富川さんはカイガマ、サルモンはガルディマ、わたしはサルキ・ヤキと、3人の重臣のやしきに分宿したのでした。この重臣の呼び名は、のちにわたしが調べたガウンデレのフルベのイスラーム王の重臣組織の

呼び名を踏襲したものです。

この3人の重臣は、毎朝9時頃には、ベラカのやしきに集まって御前会議、その日その日のいろいろな相談をする。そして、1ヶ月に1、2回の重要な議題のときは、この3人だけでなく、12~3人の重臣たちが招集されます。われわれが1泊の宿を申し入れたときや、わたしがこのむらでの居住を申し出たときなど、突発的なことが起こったときは、この広範囲の重臣会議が開かれます。

むらの重臣のことを、ブーム語では、「ドック・フー (Ndok fu)」といいます。「むらの腕」という意味です。ドック・フーは12~3人います。そして、このドック・フーのなかの3人が、重要な重臣です。その違いをわたしに説明するのに、頭のよいガルディマは、「大きなドック・フー」「小さなドック・フー」と表現したのですが、これは、本当はかれらの意識にはないようです。どちらもドック・フーなんです。はじめは、大きなドック・フーは4人だったのですが、その1人が酒飲みで、敬虔なムスリムのベラカに忌避されたようです。この大小のドック・フーの秘密は、のちにわたしが調べた世帯簿とこのドック・フー組織をつきあわすことで、おおむね明らかになりました。

おもしろいのは、ベラカのバックフィルで御前会議をやる時、それぞれのドック・フーが座る場所が、ぜんぶきまっていることです。また、客人の場所、無冠のむらびとがすわる場所、女たちや若者のすわる場所も、ぜんぶきまっています。ベラカと若者があうときは、ベラカはベラカの場所、若者はずっと離れた若者の場所にすわり、2人だからといって、決してベラカのそばに近寄るなんてことはありません。ベラカの右前がカイガマ、その隣がサルキ・ヤキ、左前がガルディマです。ガルディマの場所の後ろ側がほかのドック・フーの場所です。

3人の重臣は、基本的には、カイガマが内務大臣、サルキ・ヤキが外務大臣、ガルディマが大蔵大臣兼建設大臣、という役どころです。だから、客人のわたしを長期に世話するのは、外

務大臣のサルキ・ヤキです。たとえば、郡役所から税金を払えといってきます。だれがいくらといったことを素早く計算するのがガルディマで、「おまえもう払ったか」と催促して歩くのがカイガマ、集まった税金を役所に届けるのがサルキ・ヤキということになります。むらのモスクの建設が始まると、建設費がいくら、だれがお金をだすか、だれが勤労奉仕をするか、そういう役割分担や、モスクの設計などはガルディマの仕事、共同作業に人をかり出すのがカイガマ、まちからきた建築士や、指導にきたイスラム教師の面倒を見るのがサルキ・ヤキの仕事ということになります。日干し煉瓦を使ったモスクが、わたしの滞在した1980年に立派に建ちました。わたしも日干し煉瓦運びくらいは手伝いました。

見えてきた「部族本位制社会」の原理

もう一つ、むらの秘密がわたしの調査でわかりました。

わたしは、バングブームはブームの聖なる王ベラカのむらだから、とうぜん、むら人全員がブーム族であると思っていました。ところが、2回目の調査のときのことで、10キロはなれた隣村のバングフルベのウシ市に行こうと、1人の若者と一緒に、2時間歩いて出かけたとき、その青年が、ぽつりと「このむらには、ドゥル族もいる」と言い出したのです。ドゥルという別の部族メンバーがね。ドゥルは、もともとアダマワ高地の南、ベヌエ川上流部に住む部族です。18世紀ころから人口の増加によって、南下してアダマワ高原に移住を始めました。いまでは、アダマワのこの地域で、ブームを超えてマジョリティになっている部族で、この地域では、ブーム文化の影響をかなりうけています。端信行くんが対象にしたヤムベルトのゲセックガイは、ドゥルの居住地です。わたしは、遠出の道すがらのおしゃべりをしながら、だいたいむらのだれがブームで、だれがドゥルか、ほぼ聞き出してしまいました。

しかし、そのあと、わたしは大きな失敗をしてしまいます。知らないことに耐えてじっくり

待つという原則に反したのです。というのは、むらに帰って、サルキ・ヤキに「このむらにはドゥルもいると聞いたが」と聞くと、「だれがそんなこといった？」というのです。そこは適当にごまかしたつもりだったけれど、その日、わたしがだれと出かけたかはすぐわかるわけです。次の日になると、その若者がむらにいないのです。よけいなことをいったというので、「ところ払い」です。まもなく帰ってきましたが、かわいそうなことをしてしまいました。あとでわかったのですが、この若者が重臣ガルディマの甥だったことが、大きな意味を持っていました。

ところが、ベラカも、サルキ・ヤキも、ガルディマも「このむらはブームだけだ」とつよく言い張りました。とくにガルディマがそうでした。けれども、かれは、その若者の言によれば、ドゥル出自なのです。そして、むらの重臣たちがいないところでは、けっこう、自分はドゥルだとか、ブームだとか、何のてらいもなくいっていることもわかりました。

1972年のわたしの調査当時のバングブームのキラの分布を見ると、ベラカはじめ、村の中心部はブームが占め、周辺をドゥルが占めるという傾向が見られます。その以前はどうだったのだろうか調べてみると、20年前、1950年ころには、さらにドゥルは少なく、かつ周辺部に位置しています。

これは、アフリカの伝統的社会システムである「部族本位制社会」の本質を考えると当然のことなのです。つまり、結論をいってしまえば、部族本位制の原則に従う以上、ベラカがいるブーム族のむらに住む以上、ドゥル族の人はブーム族にならなければならない。つまり、所属換えをしなければならぬ。これが、部族本位制社会のありかたなのです。

現在の国民本位制社会ならば、あるいは植民地社会でも、ブームの地域に住んでもドゥルはドゥルのままで生きていける。バミレケ出身の商人や警官、教師が、カメルーンのどこでも、部族への所属そのまま暮らすことができる。これが国民本位制社会の原理です。しかし、部

族本位制社会の原理では、このむらに住む以上、名目的にはドゥルの人もブームにならなければならないのです。

例外は、客人として迎えられた人です。一人は、イスラーム教師のジジ先生。かれはフルベで、むらでコーランを教えています。それから、ハウサ出身のバワ校長、教師のバフィアのサミュエル先生、ササ・ンベルシ出身のドゥルのサルディ先生。もう1人は、日本からきたわたしです。かれらは、ベラカのバックフィルでの集まりのときは、「ンジャル・ゴロ」、つまりお客の場所に座ります。

ともかく、ベラカや重臣たちは、このむらは全員がブームだと主張する。でもじつは、半数以上がドゥルであるということがわかってきました。いまは国民本位制の社会ですが、バングブーム村には、かつての部族本位制社会の意識とシステムが残っていたのです。

ナーパムという受け入れシステム

じつは、ブーム以外の部族メンバーをむらへ受け入れるシステムが、ブーム社会には用意されているのです。アフリカの多くの部族には、この受け入れシステムがあります。東アフリカの牧畜民では、それはクラン（氏族）創設ということになります。ブームでは、あとで触れる「ナーパム」の制度なんです。

わたしは、キラにぜんぶ番号をつけて、親子関係や、兄弟関係、婚姻関係、その他、いろいろそこに落としていきました。そして、一つのキラのなかに、どういう人びとがいるかを調べていきました。すると、親子や兄弟はどうぜんとして、そういうカテゴリーに当てはまらない人がけっこうたくさんいるということがわかってきます。

ある日のインタビューで、ある人が「あいつはわたしのナーパムだ」といういい方をした。さて、ナーパムって何だろう。まずわかったことは、「ナー」というのは（おもに男性の）親族であるということを読み表すタームです。そして「パム」というのはオッパイのことです。つまり、ナーパムというのは、自分の母親と

オッパイをともにした男性、つまり、母親の兄弟、母方のおじを意味します。

それで、世帯簿を追っかけてみたところ、それぞれのキラにいる関係のわからなかったメンバーの多くが、キラのだれかと、ナーパム（例えば、キラの主人の姉妹のこども）の、あるいは逆ナーパム（例えば、そのキラの主人からすればナーパムにあたる、つまり、母の兄弟）の関係にある人、あるいはその子供たちとわかりました。それをさらに調べていってわかったことは、ブーム社会では、すべての人が、自分の両親と同様に、自分のナーパム、つまり、母親の兄弟にも、いろいろ扶養をしてもらう権利があるということ、それから年をとって力がなくなると、自分の子どもはもちろん、自分の姉妹の子どもにも、世話をしてもらう権利があるということです。だから、両親に扶養の能力がなければ、母方のおじに頼ることもできます。これは、じつは、アフリカの多くの地域にみられる「母方のおじ」システムで、社会人類学的解釈としては、つよい父系社会では、父系はもちろん、母の父系の影響が、その人に関わってくるということなんです。

ところが、そのうちに、このナーパムが単なる経済的な扶養でなくて、そこに大きな政治的権力が関わっているということがわかります。というのは、自分のキラのなかに、多くのナーパムを抱えているのは、むらの有力者、つまり、重臣なのです。有力者は、自分の子どもだけでなく、自分の姉妹の子どもたち、ナーパムも自分の勢力下に置くことができるということです。

たとえば、わたしがいたサルキ・ヤキのキラに、ナナという子どもがいたのだけれど、この子は、サルキ・ヤキの妹である故ファトゥマの子どもで、サルキ・ヤキの子どもたちにけっこういじめられているのだけれど、堂々としている。そして、サルキ・ヤキの妻のマエレマを、「マエレマ！」と名前呼び捨てにするのです。というのは、サルキ・ヤキが自分のナーパムで同格だから、サルキ・ヤキの奥さんは同格の妻。だから呼び捨てにしてもいいのだという

ことになります。子どもと両親は、もちろん対等ではないのだけれど、ナーパムと逆ナーパムは対等、同格なんです。じっさいは、サルキ・ヤキのこどもたちにけっこういじめられているのですが、格としては、サルキ・ヤキと同等なのです。

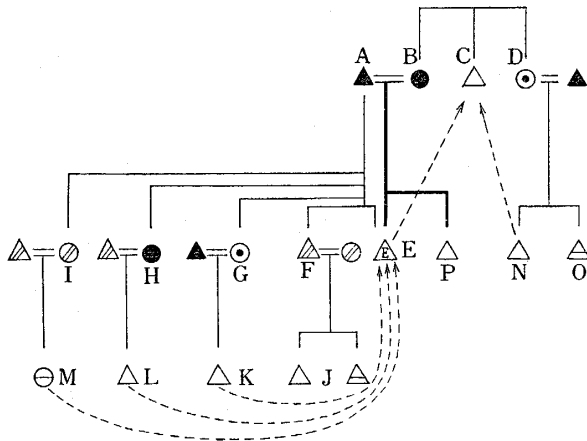
もうひとつ言うと、両親と子どもは、アヴォイダンス(avoidance)、つまり忌避の関係で、成年になるとむしろ、避けあう関係になるのだけれど、ナーパムとは、いまははっきりしないけれど、たぶん、かつては冗談関係だったのではないかと思えます。この社会では、なにか、ある人に人生上、経済上、問題が起こったときには、両親より、むしろナーパムの方が気安く相談できるのです。

そして、もう一つ、ある人の両親とナーパムのあいだには、いまでも、かなりはっきりとした忌避関係があります。ナナの父親は、ハマンという鍛冶屋で、遠くのむらに住んでいるのですが、サルキ・ヤキのキラを訪ねるときは、そこからわたしを呼んで、「ナナを呼んできてくれ」と頼みます。別に、サルキ・ヤキが怒るわけではないのだけれど、何となくサルキ・ヤキとの直接的接触を避けるのです。そんなことも一つの発見でした。

重臣ガルディマをめぐるナーパム関係

世帯簿を分析していくと、ナーパム、逆ナーパムの関係の人が、重臣ガルディマの周辺でやたらに多いということがわかってきました。かれらは、ドゥル出身なのですが、ガルディマにならって、村人のなかでもつよく「わたしはブームだ」と主張します。ガルディマの家系図をみると、その秘密がわかります。ガルディマのキラのなかには、ナーパム関係が5つ、ほかのキラを加えらるともっと多くなります。

そこで、ガルディマを調べていくと、おもしろいことがわかってきます（資料5）。ガルディマはもともと、バングブームから数十キロはなれたドゥルのヴルニー村の出身です。かれの祖父はこのヴルニー村のチーフだったんですが、この祖父が死んだとき、チーフの後継争い



資料5 ガルディマのキラの構成

△=男	○=女
▲●: 死者	
●: 他へ再婚したもの	
△⊙: 村外居住者	△○: 村内居住者
△⊖: 村内未婚者	-----: ナーパムの関係
E: ガルディマ	

に敗れたガルディマの父は、出身のヴルニー村を離れて、バングブームの近くのブッシュに居を構えたといひます。そして、ガルディマはここで10年以上育ち、バングブームのコーラン学校にかよいました。かれがそろそろ成人するところに、ヴルニー村のチーフが死んで、ガルディマの父がチーフとして戻りました。そのとき、ガルディマの才能を見込んだベラカが、ガルディマに、このバングブームに残るよう要請し、ベラカの意気を感じたガルディマは、バングブームで一生をすごそうと決心しました。そして、まずサルキ・ファダという重臣のタイトルをもらって、ここに住みついたのです。のちには、先代ガルディマの死後、ベラカに任命されて3大重臣の一人、ガルディマになります。そして、ガルディマは、かれのナーパムの関係をたぐって、たくさんのドゥルの人びとをこのバングブームに移住させたのです。

かれは、こういうベラカへの恩義があるから、絶対に「わたしはドゥルだ」とはいわない。「わたしはブーム」だといひます。わたしに秘密を漏らした若者が、じつは、ガルディマの甥だったということがここに生きてきます。ガルディマのブーム意識は、ブームである

ことがとうぜんのカイガマやサルキ・ヤキよりも、意識的なだけ、かえってつよいのです。

バングブームは、かつては2000人以上の人口を持つむらだったんですが、19世紀にこの地域を征服したフルベとの戦争や、コレラや天然痘の流行、植民地時代の強制労働の徴発などで人口が減って、もともとのブームの人びとだけでは、むらの人口が維持できなくなってしまいました。どうしてもほかの人びとが必要になったのです。それで、ガルディマが加入して、ナーパムの関係をたどって、多くのドゥルの人びとを迎え入れたのです。やってきた人びとが、このむらで結婚して、子どもができれば、父系をたどればドゥルですが、ナーパムの関係でいくとバイパスでブームになることができます。こんな入り組んだ方法で、バングブーム村はその人口を維持したのです。

だから、ガルディマは、口が腐っても「わたしはドゥルである」とはいわないのです。ベラカは、ガルディマという希有の才能ある若者を登用することによって、むらの危機を救い、ガルディマはそんなベラカの意気を感じて、一生を捧げて、協力したのです。

ドック・フーの系譜を追う

そういうなかで、ブームの近年の歴史が見えてきます。

いまから100年以上前の、先々代のベラカ、ゲルブーム (Ngermbum) の時代、マウルワリというところに都があったころ、ドック・フーは13人いました。これはたぶん、それぞれが、十分にグループとして成り立つたたくさんのメンバーを持った、父系リネージ集団だったと考えられます。いまは、ドック・フーが16人いますが、形骸的で、かつての父系集団の形はほとんど残っていません。

ドック・フーを系譜的に追求してみると、いまもつながっているもの、絶滅したもの、はつきりしないものがあります。そして、ガルディマ以下のドゥルが加わって、何とか形を保ったことがわかります。ガルディマがブームの名家の女性と結婚することによって、かれの子ども

たちは、ナーパムとして、ブームになったわけです。そんなプロセスが見えてきます。

系譜をもっと眺めていくと、4つのドック・フーの内部に、どうやらいくつかのことなる系統があるようです。一つ一つの系統は、もう3人とか5人とかのメンバーしかいないのですが、それが基本的には、父系やナーパムの要素で結びついている。そういうドック・フーだった人びとが、ガルディマがわたしに説明した「小さなドック・フー」ということになります。むらの組織としての一つのドック・フーには、やはり、少なくとも20人くらいのメンバーがいないと組織として機能しません。そこで、メンバーが減ってしまったいくつかのドック・フーを、遠い血縁関係や、ナーパム関係を手がかりにまとめ、いまの4つに再編成したということができます。そのヘッドであるドック・フーが、ガルディマのいう「大きなドック・フー」ということになります。

このような形で、バングブームは、ドック・フーをやりくりして、むらの組織を維持してきたのですが、それが維持できた大きな理由は、やはり、そとの血、つまりドゥルの人びとを加えたことにあると見るすることができます。そこが、部族本位制社会のおもしろいところというか、恐ろしいところっていうか、そういうことになるんだろうと思います。

ブーム語語彙集づくり

それにしても、むらびとの話すブーム語ができないと話になりませんから、調査と並行して、ブーム語を学びました。ミッションが出した簡単な語彙集はありましたが、辞書はおろか、基本的文法も、数年後にフランスの言語学者アジェジェさんが出版するまでありませんでした。そこで、まずは、AA研が創立期につくった「アジア・アフリカ言語調査票」を手がかりに、単語集めをはじめました。

むらの長老カイガマにお願いして、フランス語ができるかれの娘のパトゥマに手伝ってもらいました。すごく頭のいい子で、わたしが何を知りたいかすぐ理解して、よい助手になってく

れました。でも、おもしろかったです。目をさして「これは？」と聞くと「ヤルム」。鼻を聞くと「ブーム」。耳を聞くと「スクム」。これはすごい、身体名称は尻上がりの「ム」が接尾につく「ム・クラス」なのかと。すぐばれたのだけれど、「ム」というのはブーム語で「でしょう」という意味だったのです。

ともかくそういう手探りからはじまって、わたしは言語学者ではないから、1人のインフォーマントから徹底的にというのではなく、カイガマの次は、若者を数人集めて遊びながら、まあ、ゲーム風とでもいいますか、まずは動詞をフランス語で言ってみて、ブーム語を聞き、用例をいってもらおう。こうして、何回かの継続調査のあいだ、何年かかけて集めて、ブーム語語彙集ができました。そのあいだに、江口一久くんがバングブーム村にきてくれて、ブーム語の基本的な母音と子音を調べてくれました。

わたしにとってラッキーだったのは、ブーム語は母音が5つで、鼻音を入れても、日本語の母音とそう変わりがなかったことでした。子音には、閉鎖音や、いくつか面倒くさいことがありましたが、何とかなりました。もう一つの難物は、ブーム語がトーンランゲージだということ。トーンの高い、低い、その移行形が、ちゃんととらえられなければだめということです。おもしろかったのは、基本的動詞が、「行く」が「セ」、「来る」が「ジ」、「見る」が「コ」、「歩く」が「ンダ」、「言う」が「バ」、「眠る」が「ナ」、つまり、CV（子音+母音）と短いことです。「セジェ」というと、命令形「行きなさい」になるし、「ミカセナム」となると、「わたしは行くでしょう」になる。「ミカセコナケム」というと、「わたしはかれを見に行くでしょう（かれに会いにゆくでしょう）」になります。

そうやってつくった語彙集は、そのままだったらレベル的に絶対に言語学者にかなわないから、言語学者があまりやらない民族誌的な叙述、つまり、むらの構造、使っている民具、食べているものを、それもできるだけスケッチ入りで、たとえば、「食」のところでは、毎日の

主食、好物はなにか、お酒の作り方、飲まれ方まで、細大漏らさないように描いてみました。そこには、わたしのあとでブーム社会をやるというフィールドワーカーが出てきたら、これがあればずいぶん役に立つだろうという願いを込めています。とうぜん、バングブームむらの全員がわたしの先生です

ただ、この語彙集は、言語学者には評判が悪い。発音やトーンが統一されていないとか、語彙の選び方が恣意的だとか、誤りが多いとか、素人仕事だとかいろいろです。でも、少なくとも、これがあれば、まったくブーム語ができない人でも、わたしがやった苦勞を軽減できるだろう。そう思ってつくったのが、“The Classified Vocabulary of Mbum Language in Mbang Mboum: with Ethnographical Descriptions” (1968, 1978改訂版) です (資料6)。

いまこの語彙集が何に使われているのかというと、カメルーンで教科書になっています。先にふれたように、ガウンデレにガウンデレ大学

ができて、そこで自分の出身社会の郷土史や民族誌を学ぼうという若い研究者が輩出しているのだけれど、この語彙集をクエッションネアにすれば、ほかの言語や民族誌が収集できるということです。それで、ガウンデレ大学の歴史学と民族学の学科から、おまえのところに残っているのをぜんぶ集めて送ってくれということで、この間、10数冊まとめて、来日した研究者が持って行きました。

富川盛道さんのフィールドワーク

不肖の弟子で、富川盛道さんには叱られるかもしれないけれど、わたしの調査のやり方は、富川さんの影響が大きいと思います。富川さんには、北大時代にアイヌの調査について行きましたが、これは、かれの調査の終わりころにくっついていっただけで、本当に、富川さんの調査にコミットしたのは、このバングブームだろうと思います。

バングブームでは、最初の1ヶ月、富川さんがむらの王様ベラカとやりあうところを見ていました。ことばは通じないのだけれど、いわば、気合いですね。富川さんには、砂の上に絵を描いて、それを使って聞き出す。ベラカを見事にのっけてしまうのです。ベラカの住んでいるところは聖なる場所ですから、むらびとは、絶対入らない。わたしもとうぜん入れないと思っていました。ところが富川さんは、数日後に入って見てきている。あれっと思ったら、殺虫剤をもって、ベラカの寝室の南京虫駆除を申し出て、なんてね。すごいなと思いました。

sálandéú (last circumcise) 'a boy who gets circumcised at last/
le dernier garçon qui est circoncis'

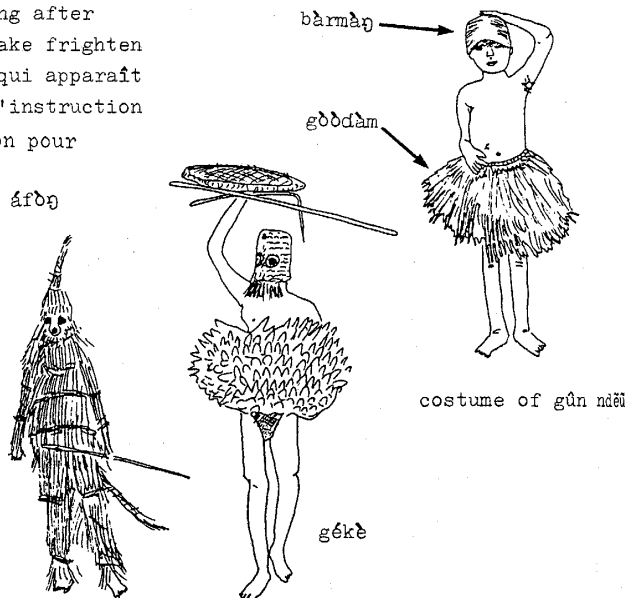
gékè, gégè 'an masked dancer who appears during the training after circumcision to make frighten boys/
danseur qui apparaît dans le courant d'instruction après circoncision pour faire peur aux circoncis'

Gékè always appears with a mask made of weaven grasses, a lance, a grass shield and grass loincloth.

ádìrà 'shield of gékè/
bouclier de gékè'

lèn gékè 'gékè's lance/
lance de gékè'

áfòṅ 'a dancer covered whole body by grasses, plays same rôle as gékè/
danseur qui est couvert par herbes, il fait même rôle comme gékè'



富川さんは、1969年のカメルーンへの第1次調査の最初の1ヶ月、第2次、第3次調査の時も何ヶ月かを、バングブームでわたしのそばにおられたのだけれど、このあいだに、わたしのブーム調査の方針が具体的になったといってもいいでしょう。夜遅くまでディスカッションして、眠くて、ベッドに倒れ込む。わたしはやれやれ終わったという気分で安眠してしまうのですが、次の朝、顔を合わすと、「ゆうべあのあと考えたのやけれど、あれはやっぱりこういうことなのかな?」、なんて連続してディスカッションが始まるのです。すごい集中力でした。

それに、もうひとつ、富川さんにはたいへんな恩義があります。2回目の調査の時、1972年だったと思いますが、わたしと一緒に調査に入っていた妻のヨーコが、熱を出しました。マラリアと膀胱炎を併発して、たいへんだったのですが、富川さんいわく「わしは、臨床経験は少ないが、医者名人芸を身につけているから心配はいらない」といわれて、抗生物質と安静で直してくれました。精神科医だけあって、すばらしいサイコセラピーでした。

別のところに書いたのですが(日野舜也「ベラカのなみだ」『通信』vol.17, 1972)、ベラカの妻のひとりの難産を見事に治めてベラカの一子を誕生させたことも、記録しておいていいでしょう。頭のでかかったのを、見事に、素手でひっぱりだしたのですから、

ベラカとわたし

バングブーム村では、ベラカ以下本当によくしてくれました。ベラカのもとには、だいたい毎日、朝のあいさつに行き、できれば30分くらいはいろいろな話を聞くわけです。ときには、ベラカの嫁さんや子どもたちがわたしを呼びに来ることもありました。ベラカはブーム語しかはなさないから、わたしもブーム語だったのだけれど、何とか話は通じました。なにか、以心伝心みたいなのところもありました。

わたしは、むらびとでは絶対考えられないけれど、ベラカのそばに行って、握手はするし、じっと見つめ合う。1998年に訪ねたときは、白

内障の手術をしたとかで、分厚い補正のめがねをかけていましたが、「おまえここにきてすわれ(Ji kab jai,je)」と、かれの御座所に一緒に座り、肩を並べておしゃべりをしました。「腰が痛い」というから、「このへんですか」などとさすったりしましたが、そんなことはむらびとではあり得ないことです。

むらびとは、ベラカは100歳だなんていっていたけれど、たぶん1906年の生まれで、そのころ(1970年代)は80歳になっていなかったのではないかと思います。嫁さんが10数名、子どもが30人以上いました。1972年の3回目の滞在のとき、滞在中にわたしの妻ヨーコの母親が日本で急逝しました。それを聞いたベラカは、その夜、朝までモスクにこもって、彼女の平安を神に祈ってくれました。これには力づけられました。

ベラカが語る口頭伝承

ブームの王様・ベラカは、最初は単なる村長さんと思っていたんですが、実は歴史的には三つの役割が重なった人だったんです。一つは、ブームの伝統的な聖なる王様です。二つ目は、19世紀にこの地域が、ガウンデレにいる王様を中心にしたフルベという部族による聖戦(ジハード)によって征服されました。その結果、ガウンデレのフルベ族の支配下に入り、ブームの土地はほとんど取り上げられて、ベラカのテリトリーは自分の村の周辺だけになったんですけれど、フルベによってベラカは「ジャウロ(jauro)」という、村長に任命されました。三つ目は、植民地体制とその後のカメルーン国民社会の中では、ガウンデレ郡の一つのむらの村長。そういうように、ベラカには、歴史的に三つの役割が重層しているわけですね。

ベラカは、伝説のベラカの始祖、ベラカ・ニヤサラブームの話をしてくれました。むかしむかし、3人の兄と一緒に旅をしていたニヤサラブームが、道ばたの老女に親切にしたので、この地域の王権の象徴を手に入れ、逆に兄たちに命令して、それぞれ、東、南、西へ15日の旅をさせ、それぞれの国をつくったとか、ニヤサ

ラブームには双子の子どもがいて、バングブームとガンハの国をつくったとか、歴史学者エルドリッジ・ムハンマドの説では、これは、支配者が作り上げた支配者の正当性を語る支配者の歴史だといいますが、まあ、古事記みたいなものでしょうか。ベラカは、そういう語り部の役割も担っていたようです。

でも、この伝承は、東がベラカベレ、南がブッサ、西がマナ、ニャサラブームの双子の一人がバングブーム、一人がガンハと、いまもその子孫がベラカとして君臨しています。のちにわたしは、ブッサを訪れました。そこには、かなり零落して、権威も持っていませんでしたが、ベラカがいました。ガンハのベラカは、バングブーム以上に権威を持っていましたが、メッカへ巡礼に出かけて、そこで客死しました。もちろんそのあとにはかれの息子が継承しています。

バングブームのベラカとガンハのベラカは、両方とも聖なる王様だから、ともに超自然的呪力を持っていて、2人が会うとどっちか弱い方が死ぬといわれていました。それで、両方ともガウンデレのフルベに支配されたんですけれど、フルベの王様・ラーミドの所に挨拶に行くのにも、午前中にバングブームのベラカが行けばガンハのベラカは午後に行くとかして、ずっと会わないようにしていました。ところが、バングブームのベラカはイスラームにすぐ改宗したんですが、ガンハのベラカはなかなか改宗なくて、先代の時にやっと改宗したんですね。で、改宗してしばらくして、メッカに巡礼に行くことになった。

それで、わたしがガンハのベラカの所に出かけて行って「あなたの話を詳しく聞きたい」といったら、「わたしはこれからメッカに出かけるので、帰ってきたらゆっくり話そうじゃないか」ということになりました。そして、もう2人ともイスラーム教徒になったのだから会ってもよからうというので、バングブームのベラカが、ガンハのベラカのところに、メッカ行きの祝福に行ったんです。「お前、いよいよメッカに行くのか」と。で、帰ってきて満足げだった

んだけれども、そのガンハのベラカがメッカで死んじゃったんです。呪力の弱い方か何だか知らないけど、会ったらどっちか死ぬっていうのは本当だったんですね。

ブームの重臣・ニャンブームになる

最初にいったとき、むらにはニャンブームというドック・フーがいました。昔どこかから流れてきてこのむらに落ち着いたというブームの老人で、むらで唯一の機織機をもっていて、西アフリカに広く普及している、細長い布を織る織機で布を織っていました。その後、わたしが日本にいるあいだに、このニャンブームが死んで、その名跡があいていたのですが、1974年の3回目の訪問の時、わたしはベラカに呼ばれて「今日からおまえはニャンブームだ」と告げられました。ちゃんと重臣会議できめてくれたそうです。そして、ヨーコは、マンブーム。ニャンブームの女性形です。それから、バングブームではもちろん、ガウンデレでも、わたしはニャンブームで有名になりました。駐バングブーム日本大使という役どころでしょうか。

何よりもたのしかったのは、ドック・フーになると、その会議に出席しなくてはならないのです。参与調査をしているわたしに、絶好の機会を与えてくれたわけです。また、おまえがこのむらに住むなら、この土地をやるっていう、市場のすぐそばの場所が、わたしのキラをたてる場所になっていました。ときどき食事が届けられたり、ベラカのすぐ止まる中国製の目覚まし時計の時間あわせを引き受けたり、世界事情をご進講したり、誰もいないとフランス語の手紙の翻訳を頼まれたり、日本に帰るときにおみやげに生きたヤギをもらったりと、いろいろ良い思い出ができています。

バングブームの変化

ただ、この何十年かの急激な変化は、バングブーム村を大きく揺さぶっています。1960年代に、英明なベラカは、子どもの教育が大切と考え、むらに公立小学校の誘致をしました。キリスト教のミッションスクールならすぐできたら

しいのですが、敬虔なムスリムであるベラカは、あくまで、公立の小学校の設立をのぞきました。その結果、小学校はでき、子どもたちの教育も実現しましたが、そうすると、小学校を出た子どもたちが、まちでの就職を目指して、むらにいつかなくなり、若者たちはガウンデレに集まることになりました。むらの教育普及を夢見たベラカの希望は、こうして、むらの過疎化を促進することになったのです。

1969～72年ころに、バングブームの小学校にいた生徒のうち10年後の状況をしらべますと、男性の38.1%、女性の27.1%が、20年後にガウンデレに住んでいます。それに対して、バングブームに残っているのは、男性が36.5%で、女性が17.4%。どこの国でもそうなんでしょうが、学校ができると子どもたちは、ネクタイを締めた仕事をしたり、仕事のあてがなくとも都市に出て行くということが、バングブームでも起こったわけですね。これが、バングブーム調査の終わりころ、わたしが見た現実でした。

ベラカはその後、1998年に亡くなり、2002年に訪ねたら、北部州の郡知事をしていた一番息子があとを継いでいました。わたしが初めて先代のベラカに出会ったころのベラカと同年配でした。先代はブームの聖なるベラカとして、食事をするところは絶対に他人に見せなかったのに、現ベラカは、われわれが行くと早速用意をさせて一緒に食事と、事態はすっかり変わっていました。村人のベラカに対する行動のなかには、まだベラカの神性はのこっていますが、新ベラカにはその意識はほとんどないようでした。

わたしを世話してくれたサルキ・ヤキも、言語調査の相手をしてくれたカイガマも、亡くなっていました。ガルディマは元気で、喜んでくれました。わたしが滞在していたころ子どもだったみんなが、一様に2児の父、3児の母になっていました。でも、みんなから「ニャンブームよく来た (Nyaambum,jiware,jaama,jaama poi!)」と、握手攻めにありました。ここにも、わたしの故郷ができています。

バングブームで、いちばんたのしかったこと

の一つは、ガルディマとのやりあいでしょうか。わたしがいろいろしらべて、「おまえは、ヴルニーむら生まれだろう。あれはドゥルのむらだったよね」といっても、「でも、わたしはブームなんだ」。最後までがんばりました。最後まで「わたしはブームだ」。絶対に「わたしはブームになったのだ」とはいいませんでした。おまえはわかっているくせにそういっているのだという感じで、苦笑いをしながら、絶対にね。

バングブームとガウンデレ

さて、バングブームの調査が69年から73年くらいにかけての継続調査でだいたい一段落したあと、わたしは、1976年バングブームの人びとともに、県都ガウンデレのカルチェ・アウディ (アウディ地区) にあるバングブーム居住区に住んで、バングブームとガウンデレの関係を調べました。これは、「アダマワ地域社会における都市と村落 —北カメルーンのガウンデレとバングブームの場合—」(富川盛道編『アフリカ社会の形成と展開』, 同朋舎, 1980) という論文になっています。

現在のブームにとって、ガウンデレはまず、進学先であり、就職先です。成績が良ければ、バングブーム村の小学校を出て、ガウンデレの中学校へ来ることができる。それから就職先になる。就職でおもしろいのは、ガウンデレの町では部族ごとの分業がかなり発達していることです。ハウサ、これはナイジェリアから来た部族です。かれらは肉屋のギルドをつくっている。つまり、牛の首を切り、肉を売るのはハウサと決まっている。ところが、そこにブームがくつつくわけです。ブームが何をやるのかというと、ハウサの人が首を切った牛の解体をやる。牛の皮を剥いたり内臓を取り分けたり。だから、ガウンデレの肉市場に行くと、いわゆる精肉はハウサが売っていて、内臓とか舌とか足とかは、ブームが売っている。ハウサの牛のギルドは、カメルーン全体に広がっています。首都のヤウンデでも、肉を売るのは、みんなハウサの商人、ギルドです。すると、それにくつつ

いてブームもトットコトットコと首都あたりまで出かけて行く。それが国民社会の中でブームが占めている役割なんですね。

カルチェ・アウデイには、ベラカがガウンデレにきたときにくらすやしきがあって、ベラカのキラには、第1夫人アベランバが常住していました。ほかに、ベラカの子どものやしき、カイガマ一族のやしき、サルキ・ヤキ一族のやしきがありました。わたしなんかは、サルキ・ヤキの客分だから、ガウンデレでもサルキ・ヤキのやしきに泊められました。おもしろいのは、ガルディマ一族の居住するドゥルのやしきはサボンガリのドゥル居住区にあったことです。バングブーム村における部族社会原理と、ガウンデレにおける部族社会原理が見事にできてきました。

19世紀に、フルベ族のイスラーム聖戦がアダマワ高原にも展開して、地元のブーム社会は戦争に負けて、フルベの支配下にはいりました。ブームのベラカは、服従とイスラームへの改宗を条件に、自分の首都周辺の支配を安堵されました。そして、フルベ王ラーミド支配下の重臣ジャウロに任命され、その代わり、ガウンデレの町に自分のやしきを置きます。ガウンデレに第1夫人を人質として常駐させ、1年に何ヶ月かはバングブーム村から出てきて、フルベのイスラーム王ラーミドのところに挨拶に行くというようなことが義務づけられました。日本の参勤交代みたいなものでしょうか。こうして、ガウンデレのベラカの上屋敷のそばに、バングブームの人びとが住む下屋敷ができたのです。

植民地化以後の社会の中でも、村長さんは時々地方行政に出かけていかなければなりません。それで、ベラカはガウンデレの中にも自分のやしきを持つ。ベラカのやしきのそばには、ベラカの子どもたちがすむやしきや、カイガマのやしき、サルキ・ヤキのやしきができる。こういうように、ガウンデレの中でもバングブームの王様のシステムが残っているんですね。つまり、20世紀以後の植民地、国民社会のもとでの近代的変化にも、フルベ時代の支配関係を、都市村落関係に置き換えて、適応して

いったということが出来ます。

むらの学校を卒業して、上級学校に進んだ子はもちろん、就職をもとめてやってきた子どもたちや、むらで離婚して行くところがなくなった女たち、病気や所用でガウンデレに出てきたバングブームの人びとも、みんなここ、カルチェ・アウデイにわらじを脱ぎます。ここに住む成功者である、カイガマの娘の夫、アダム（バングブーム出身）のところの夕食には、10数人の若者が集まってきます。大ぶりの皿に盛られたモロコシの練りだんごと、わずかに肉が入ったスープを共食するのです。若者は、月に300フランCFA、日本円にすれば数百円の食費を払って、夕食だけ、ここで提供してもらう。朝は、そこいらで売っている揚げドーナツやフランスパンを食べ、昼食は抜き。夕食をここで世話になっていけば、まず飢え死にすることはない。みんなおしなべて、こうして就職や、再婚のチャンスを待つのです。そのまま娼婦のような生活をする人もいますし、刺繍や編み物などの手内職や、市場での野菜などの商売でかすかす生きていくことも出来ます。

カルチェ・アウデイの生活は、まあいえば、貧しい生活です。若者は、水くみや荷物運びなどの肉体労働、コーラナツやあめ玉やチュウインガムの行商、数百円の日銭を稼いで、あとはアダムの世話になって、という暮らしでした。

1976年、このカルチェ・アウデイに住んでいたときに、ガウンデレで「全国農業博覧会」というのが開催されました。わがサルキ・ヤキも大きなヤムイモを展示したのですが、この1週間の催しに、バングブームからじつに200人以上、むらびとの半分くらいが、50キロの小道をたどって、ガウンデレに出てきました。わたしの部屋も、わたしのベッドの下に3人、ベッドサイドにも何人かと、それこそ折り重なって寝ました。

いよいよガウンデレ調査はじまる

1978年から、わたしのガウンデレ調査が本格的に始まります。

ガウンデレのカルチェ・アウディに住んでいたときに、バヤヤさんというフルベの人と知り合いました。江口くんを通じて知り合った人で、はじめは、アダマワ県の農務部長、そのあと、天下りなのか、政府の外郭団体、小麦栽培普及を目指す「ソデブレ」、強いて訳せば「小麦栽培開発公社」とでもいうところにつとめていました。1976年にガウンデレを去るときに、次はガウンデレの中心部に住もうと決め、わたしが住まわせてもらうやしきの選定を、密かにバヤヤさんに頼んでいました。ここから少々、わたしの著書の引用をさせていただきます。

「わたしは、このときのことをいつまでも忘れられない。雨期のさかりで、朝方かなりの雨がふり、そのあとカラリと晴れた日だった。しっとりとした湿気を含んだ、水たまりの多い道を、わたしたちはバヤヤ氏のジープでのろのろ進んでいった。まちの主要道路はたいてい舗装されているが、そこから百メートルほどはずれたこのあたりは、まだ泥道で、車が通るたびに、人びとははねる泥水を避けて立ちどまらなければならなかった。車がとまると、そこは奥まったやしきで、……（中略）このあたりでは最も一般的な入口のいえがあった。……（中略）広い中庭を通して、正面にひときわ大きなおもやがあるのが目に入った。土台が一メートルほど嵩あげされたおもやの真ん中には、幅4メートルの3段の階段があって、その両側の柱につらなって、シンメトリーに、花模様のすかし彫りにかたどったブロックを積み重ねた手すりがいっぱいにのびていた。階段と手すりの向こう側には、広いコンクリート床のベランダが広がり、階段をのぼりきった中央に一枚ドアの入り口があった。ドアは内側にひらかれ、そこに薄汚れたカーテンが、檻樓のようにぶらさがっているのは、このあたりのどこのフルベのいえでもよく見られることであった」（日野舜也『アフリカの小さな町から』筑摩書房、1984, pp. 11-12）。

このたたずまいがとても気に入って、わたしはいっぺんにここを次のすみかと決めたのでした。ベロ・イッサ・バオシという人の家です。

79年から80年、国際交流基金からお金が1年間もらえるということ（国際交流基金・学者芸術家等長期派遣計画）で、ここに1年間住み着いて調査をしました。

ガウンデレの中核層・フルベ

いよいよガウンデレの支配者であるフルベの社会に入っていくことになりました。

フルベは、ウジジにおけるスワヒリのように、ガウンデレの中核層を占めています。ただ、ウジジと大きく違うのは、ウジジのスワヒリはひとかたまりだったんですが、ガウンデレの中核層には、支配する自由民と被支配者であるドレイというシステムが厳然として残っていることです。フルベ、ハウサなど「リンベ」といわれる自由民の層と「マチュベ」といわれる、ブーム、ドゥル、その他の被征服民が存在する。マチュベはドレイと訳されていますが……。しかも、もう一つ、王様の重臣の組織があります。王様であるラーミドは、自分の家来たちの中からいろんな重臣を選んで、その重臣のシステムがあるわけです。旧市街の中で一体化していたスワヒリの世界ではない。

家主・バオシ

わたしの家主のバオシの先祖は、ナイジェリアのバウチというところの出身です。北ナイジェリアの、割合カメルーンに近いあたり。19世紀の中頃に、フルベの人たちが聖戦ジハードを起してガウンデレ周辺を征服したんですけれども、実は彼らはそんなに信心深いイスラームじゃなくて、そのへんで牛を飼ってたフルベがそのままイスラームになっちゃったわけです。そこで「われわれにはイスラームの知識が足りない。だからイスラームの先生を送ってくれ」という手紙を、フルベの王国の中心であるカノにいた、モハメッド・ベロという聖戦を起した人の息子に送った。それでそのモハメッド・ベロが、バオシ（ナイジェリアではバウチ）という町に住んでいる1人のイスラームの先生を、「辺境のアダマワへ行ってそこでイスラームの先生になれ」ということで、よこしたわけで

す。それがバオシの曾祖父で、かれはガウンデレにイスラームの学校をひらきました。そのバウチが、フランス語読みだとバオシになっちゃうわけですね。

このバオシは、今はイスラームの先生ではないんですけれども、フルベの非常に重要な重臣の1人です。ところが、その重臣であるバオシが、ラーミドのところに行ったのを、わたしは2年間のうち何回かしか見たことがないんです。イスラームのお祭りの時に挨拶に行く程度。あとは、そのラーミドがちょっと頭がおかしくなって、カメラを持って近寄って来た1人のご婦人をバツと手ではらって、カメラをこわしてしまいました。ところが、そのご婦人はカメルーンの観光大臣の奥さんで、大騒ぎになったため、その観光大臣のところへ謝りに行くって仕事はバオシがやった。そのぐらいで、ほんとに関わりがない。昔はラーミド所有の女の人をもらったら、その見返りにウシを返すということもやっていたようだけれど、今はそういうこともやっていません。

バングブームでは、重臣の組織があって、それが機能していました。3人のドック・フーが、毎日のようにベラカのキラに集まって会議をやっていました。けれども、ガウンデレのフルベの重臣であるバオシは、ほとんどラーミドのところに行くことはないのです。せいぜい、イスラームの祝日にご機嫌伺いの挨拶に行くくらいです。

わたしは、バオシの家にずっと住んでいたんですが、そのうちにガウンデレの市長さんにラーミドを紹介され、ラーミドのやしきに挨拶に行くようになりました。1週間に1回とか2回。バオシよりわたしの方が、ラーミドのところによく行っていました。

フルベとブームの関係

ラーミドのやしきでは、おもしろいことをいろいろ発見しました。

フルベのラーミドは、フルベの王様だから、とうぜんフルフルデ（フルベ語）をはなします。もちろん、家臣ともフルフルデでしゃべ

る。ところがラーミドが、マチュベ、ドレイであるブームの人としゃべるときは、ラーミドがフルベ語でしゃべり、マチュベはブーム語でこたえる。逆に、マチュベがブーム語でしゃべると、ラーミドはフルベ語でこたえる。フルベ語とブーム語が、行ったり来たりするんです。それは、ドレイの方はフルベ語を理解しているし、王様の方はブーム語を理解しているということの意味していますよね。

それで、最初のうち、わたしがフルベ語はそんなに上手じゃない、ブーム語だったらいくらかしゃべられるというようなどころで行くと、他の人がいない時には、ラーミドが突然、ブーム語でしゃべりだしたんです。そしてわたしとはブーム語でしゃべるといふ。わたしが行くと、「Nyaambum, jije, re!」、日本語で言えば、「ニャンブーム、ここへおいで」という意味だけれど。

それで、いろいろ問いただしてみると、ラーミドのお母さんがブームなんですね。ブームのお母さんのそばで育ったから、彼にとっては、ブーム語の方が、先に覚えた言葉なんです。だから、わたしなんかとふざけながらおしゃべりするときはブーム語でもできるし、「むしろブーム語の方がわたしは得意だ」といふ。フルベの王国の建前としては、おこりえないことをやる。

さらに、歴代のラーミドを調べると、お父さんはもちろんフルベだけれど、お母さんの方にはフルベはほとんどいなくて、ブームが大半なんですね。そうすると理論的には、最初、純粋なフルベと純粋なブームが結婚して子どもができたら、子どもはフルベとブームと半々でしょう？ その人が王様になって、またブームの人と結婚したら、フルベは4分の1になる。そうやって、だんだんだんだんと、ラーミドは、ブームの方に引き寄せられていく。だから、フルベの王様と言いつながら、顔つきは、ブーム的な顔になっているんですね。

しかも、ラーミドのやしきの中に毎日日参しているんなことをやっているのは、ほとんど全てが、フルベじゃなくて、マチュベ（ドレイ階

層)の重臣なんです。つまり、ブームやドゥルなど、被支配者の中からいろいろ名前をもらった人たちが、ほとんど毎日のように出てきてラーミドのそばにいる。そういう人たちはもちろんブーム語をしゃべるし、わたしとはブーム語でしゃべる。けっきょく、フルベの王様のおやしきの中でいちばん流通するのはブーム語だということになっている。

さらにおもしろいのは、フルベの王様のやしきです。塀で囲まれて、まず表に向かって入口の家がある。それを「バックフィル」というんだけど、これはブーム語なんです。「ジャウルール」という立派なフルベ語もあるのだけど、ガウンデレでは、ブーム語のバックフィルが使われる。ラーミドの第1夫人も「マーキラ(キラのお母さん)」というブーム語で呼ばれている。バックフィルですが、これが2つや3つじゃなくて、7つくらい通ってやっとラーミドの場所に行ける。しかも、ラーミドの場所への入口にはマチュベが1人いて、ラーミドが中へ入ると一緒について行って、後ずさりではうきではいてラーミドの足跡を消す。それから、やっぱりブームと同じように、ラーミドの場所と女の場所ははっきり分かれています。つまり、はっきりいえば、ブームの聖なる王様・ベラカのやしきの構造を模倣しちゃったんですね。フルベの王国の王様のやしきは、カメルーン、ナイジェリアで数十以上あるんだけど、こんな形で仰々しく3つも4つも入口の家がつながっているというのは他の地域にはありません。こういう形のやしきを持っているのは、このブームの住むアダマワ地域と、嶋田義仁さんが調査したレイブーバ、ここも、ブームの居住地域、そこだけしかないんです。

それから、フルベのラーミドに「お前さんは割礼をどうやってやった?」と聞いてみると、「割礼はブームの歌でやった」というんです。つまり、フルベの人達も割礼はブームの人達と一緒にあって、ブームの割礼の歌“Fe hoi ti wao woo”、「ブッシュに怪物があらわれたぞ」という歌でやる。怪物をみんなで見に行こうと行って、こどもたちを割礼の橋へ連れて行くわけで

す。それを、ラーミドも幼時にやっていたというのです(割礼については既出資料6を参照)。

つまり、ガウンデレにやって来て支配をしたフルベが、文化的にはその先住民であるブームのいろんな文化を取り入れたということが、だんだんわかってきたんです。だから、フルベのガウンデレでの体制というのは、実はブームを抜きにしては語れない。つまりそれは、このガウンデレとバングブームを結んだ地域社会の中で、地域の共通文化としては、後から来たフルベの文化よりブームの文化が根強く沈殿して残ったということになるわけですね。

ガウンデレにおける部族と職業

ガウンデレの町では、基本的にはウジジと同様に、職業について調べました。フルベの職業、ハウサの職業、それからブームの職業、支配者と被支配者の職業を調べていくと、そこはかなりきちんとした階層関係が出てくるのがわかりました。

フルベとハウサは、両方ともイスラーム教徒ですが、ハウサがどんどん大きな商売をやるようになるのに対して、フルベはいくら商売をやっても大きくならないんです。それはなぜかというと、ハウサは自分が店を持つと、すぐに自分の一族の誰かを呼んでそこで商売させたり、手伝わせたりするし、自分の息子ももちろん教育するし、働いている人の中で「こいつは見込みがある」と思ったらしばしばその人にも資金を出して商売をやらせるので、一族単位でどんどん大きくなっていく。ところがフルベは、一番仲の悪いのは兄弟で、その次は父親と子どもだといわれるぐらい、そういう関係ができません。だから、ひとりひとは店を持ってやっても、自分の息子に資金を出して大きくしようとかいうことは、ほとんど考えない。息子は息子で、お父さんにウシを売らせてなんとか金をふんだくろうと考える。そういう一種の緊張関係があるんです。むしろそれよりは、母方の叔父、これはアフリカの親族組織の中で非常に重要なんだけど、父親より

も、母方の叔父の方にいろんなことを頼んだり、たがいに頼りにしたりするというようなことが起こるんですね。ブームのナーパムに近い関係があるのです。

それから、ハウサは誰か金を貸してくれる人がいたならば、どんどん借りて商売を大きくしていく。ところがフルベは、たとえば、政府が中小企業資金みたいなのを貸すといっても、借金が怖くて借りないんですね。そして、おもしろいことに、町に住んで商売をやったり、イスラームの先生になったりするくせに、フルベには「自分たちは牛飼いだ」という意識がある。だから、国勢調査では、牛が1頭もないガウンデレの町で、29.9%ものフルベが、胸を張って「わしは牛飼いだ」って答えるんです。

それはどういうことかということ、フルベの大半は、じっさいに牛を持っているんですが、町の中では飼わずに、ぜんぶ田舎のボロロと呼ばれるフルベの牧畜民に預けているんです。そのボロロたちは、ウシが生産したミルクとかその他のぜんぶ、自分で使っている。それから、生まれたウシの何頭かに1頭くらいをもらえろという、そういう条件で、町のフルベの牛を預かっている。だから、まちに住んでいても、フルベは「自分は牛飼いだ」という意識があるもんだから、「牛飼いだ」と答えちゃうわけです。これは、フルベ語で「プラーク」といわれるんですけど、プラークのプルはフルベのフル、つまりプラークっていうのは「フルベらしさ」ということですね。西のセネガルから、東のスーダンまで広く分布するフルベに共通したフルベ意識なんですね。その一つが、「われわれは牛飼いなのだ」ということなので、まちに住むフルベも、その意識を共有しているわけです。たとえば、まちのフルベも、その所有するウシを売ってメッカに行くというのならまだ許せるけど、ウシを売った金で食っちゃったとか、生活の足しにしたとかいったら、恥ずかしくてそんなこと人にいえない。ウシを持っているという点では、確かにかれらは金持ちなんですけれど、まちに住んでいて、そのウシをたやすく売ることはできないわけです。だから、現

実はどんどん貧乏になっていく。貧乏になって、まず王様から、かつて与えられた土地を少しずつ売る。特に、郊外の土地を売ってしまう。その次に、自分のやしきが広いので、その広いやしきの中に家を建てて人に貸す。そうすると、何とか生きていける。極端な場合は、やしきの中に、敷地いっぱい賃貸用の家を何軒も建てて、長距離運送の運転手とか、その愛人とかが賃借することになる。

そしてもう一つ、フルベの男たちは、東アフリカのスワヒリと同じで、肉体労働を絶対やりたがらない。肉体労働は、セントラルアフリカやチャドから来た肉体労働者にやらせる。ハウスポイなんていうのは、そういう人達がやる。それから、食べ物を扱う商売はしない。フルベの社会では、男と女の役割があって、女の火のところに男が近寄ることはないんです。焼いて食うのは、男でもできる。肉を焼いたりトウモロコシを焼いたりはいいいんだけど、鍋でものを煮るのは、女の仕事。だから、町で焼肉を売っている男のフルベはいるけど、料理屋やレストランはありえない。レストランは、大半が「アラブショア」という、この近くまで進出してきたアラブ系の人達がやるわけ。

そういうように、フルベは、いろいろな可能性をぜんぶ、自分で閉じてしまうわけです。だから、金持ちにはまづなれない。まあ、コーランをちゃんと読めるというのが唯一の誇りですね。そして、自分のやしきの中の家を人に貸していれば、少なくとも自分で労働しなくてもいい。家賃がいくらか入ってくれば、貧乏でもいいやというようなことになるわけですね。よくいえば、コーラン三昧で清貧にらすということになります。

フルベの新興勢力

ところがそこに、ガウンデレの重臣とかの出身じゃなくて、周辺部において、それまで地位が高くなかったフルベの中から、フルベの遺習にこだわらない、能力あるのが出てくる。その最たるのが、アラジ・アボという人です。このアラジ・アボは、最初にわたしが行った69年に

は、ガソリンスタンドのガソリンボーイをやっていました。けれども、そのうちに自分でトラックを1台買って、ガウンデレとドゥアラという港町の間での運送業を始めたんです。そして、車を2台3台と増やしていった、人を使ってやるようになった。それが69年頃ですね。70年代の後半くらいになると、もうすこし北にあるガルアという町の金持ちのハウサが、アラジ・アボという男を見込んで資金を出してくれた。それで一気に大きくなって、80年に行った時にはトラックが数百台、そして、港町のドゥアラに、貿易会社を1つ持っている。それから、ガウンデレではガレージを持っている。ガソリンスタンドもどんどん増やしていった、そのうちにトマトの缶詰工場を作って、さらに、ガウンデレのフットボールチームを買収して、現在では、カメルーンの中で5本の指に入る金持ちになって、大統領の顧問団みたいなのに関わっています。さらに、フルベらしく、ウシを手に入れ、それをブッシュのボロロに預けるのではなく、自分で牧場をもち、フランス人の専門家を雇って、近代的牧畜をめざす。いまは、ウシを1500頭も所有している。このアラジ・アボという男は、敬虔なムスリムで、じぶんの私有の大きなモスクを建てた人ですから、酒なんかは絶対売ったりしません、フルベのほかの商人には、自分は飲まないけど酒を売るような商売はやってもいいだとか、ホテルを持ったりした人もいます。2004年に、人間学研究所の公開講演会「アフリカ都市研究ことはじめ」に参加されたガウンデレ大学のジンギさんは、このアラジ・アボの成長の過程を社会的に研究され、その報告も出版されています。

ところが、そういう新興の無名のフルベには嫁さんが何人かいるんだけれども、その嫁さんの一人は、フルベの重臣の家からもらう。そうすると大体その家と対等になるわけです。しかも、そのアラジ・アボが、わたしが滞在した1980年に、日本円にすると1億円ぐらい出して、ガウンデレの町の真ん中にあるモスクがもうだいぶ古びてきたので、これを建て直そうじゃないかと。そうすると、ラーミドも「それ

じゃわしも360万出しましょう」とかいうかたちでお金が集まって、お金が出せない人は肉体労働でモスク建設に従事するというふうで、新しいモスクができる。

つまり、もともとは辺境のフルベと馬鹿にされていた人が、一気にガウンデレの町の真ん中に出てくる。その一方で、相対的に、いわゆるフルベの名家は経済的に没落する。そんなことが、今ガウンデレではかなり極端に起こっています。

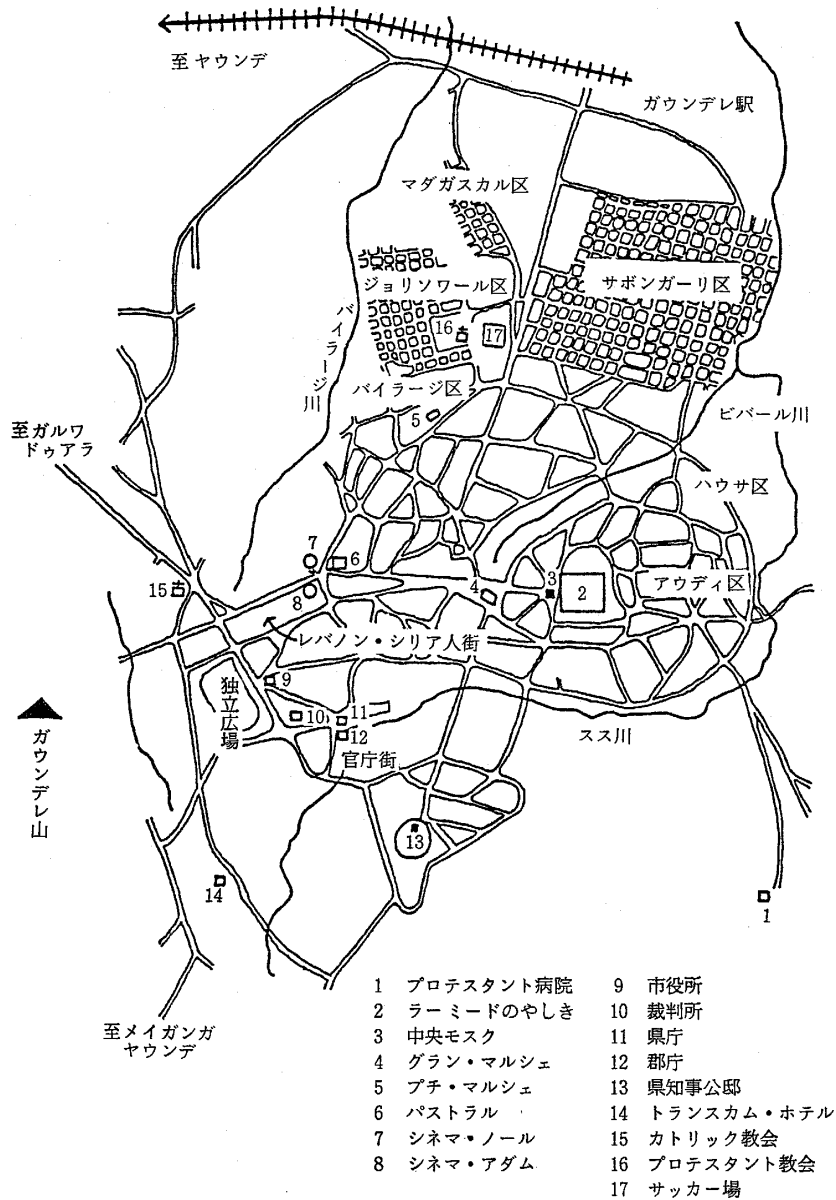
ガウンデレの旧市街と新市街

ガウンデレの町は、わたしが最初に行った69年には2万7000人の人口でしたが、80年には5万8000人、今では10万人を超えています。それは、旧市街の人口が増えたのではなく、周りのいわゆる新市街、ドイツ・フランスの植民地時代にできた町が大きくなったからです。

1974年に、港町のドゥアラから首都のヤウンデを通して、ガウンデレまで鉄道ができました。その鉄道の終点がガウンデレです。ドゥアラから来ても、ヤウンデから来ても、このガウンデレを通らないと北カメルーンへ行けない。ガウンデレは交通の要衝になったんです。それで人口が一気に増えたんですね。そして当然のように、新市街が栄えて、そこに市場ができて、もちろん旧市街の中にも市場がありますけれど、旧市街のシステムと新市街のシステムが、別々のかたちで発達するということになりました(資料7)。

だけど、実は昔どおりの生活をしようと思えば、旧市街の中だけでも暮らせるんです。仕立屋さんもあるし、布を売る店もあるし、いろんな細工屋もあるし、食料品店やレストランもあって、旧市街だけでも生きていける。それから、新市街だけで生きていくのも、もちろん可能です。ただ、旧市街と新市街の大きな違いは、旧市街には酒を売っている店が1軒もないけど、新市街の方は10軒に1軒くらいが酒屋やバーになっている。

成功したアラジ・アボは、旧市街、新市街の両方を渡り歩いて大きくなりました。ところ



資料7 ガウンデレのまち

が、わたしの世話になっていたバオシの息子、ジジ・イッサというんですが、ある時、わたしはかれを、新市街の市場に連れていったんです。そしたら、キョロキョロ見て「ここに来るのは11年振りです」という。じぶんのやしきから、あるいて200メートルもないんですよ。それなのにね。それから、双子の妹がいるんだけど、「ボタンが欲しい」というので、うちのカミさんが一緒に新市街の市場に連れていったら「わたしは、ここは子どもの頃に来たきりだ」という。そのくらい、新市街に行かなくなったって、旧市街の中だけでも、ちゃんと暮らせる。

この場合、サウゾールの分類でいけば、ガウンデレは、植民地時代以前にアフリカの自生的な社会のなかで発展したAタイプの旧市街と、植民地時代の中で発展したBタイプの新市街がくっついて一つのまちになったと考えることができます。ところが、ウジジの場合は、別に行政府の中心であるキゴマが8キロ先にできたから、そこがBタイプの都市になり、ウジジはAタイプのままで残っちゃった。ガウンデレも旧市街は旧市街で残っているけど、町全体では、新市街の方がむしろ経済的にも文化的にも強いということが起り、相互に、偏見とか不信があらわれてくる。たとえば、わたしの車が壊れたときに、フランス人のガレージに持っていったら、それを聞いたペロ・イッサが「それはよかった、新市街のアフリカ人のガレージに持っていったらこわされてしまいます」。そんな調子です。逆に、新市街の人たちは、旧市街のフルベはみんな怠け者

で、ろくなものじゃない、といいます。

バングブームのブームを調べ、バングブームとガウンデレの都市・村落関係を調べ、そして、フルベの王都であり、交通の要衝でもある新興都市・ガウンデレを調べたのが、カメルーンのアダマワ高原でのわたしの調査です。ガウンデレでのペロ・イッサ一家との交流を中心にえがいたのが『アフリカの小さな町から』（筑摩書房）という本です。1984年の出版で、とくに絶版になっていて、書店ではもう買えませんが、わたしのガウンデレでの暮らしの記録です。

(つづく)